

(別紙1)

論文の内容の要旨

近代以来韓国に紹介された外国文豪の中で魯迅ほど韓国人みずからの歴史的・文学的コンテクストとの深い関わりの中で読まれた人はいないであろう。本論のテーマは一九一〇年代末から植民地解放に至る、すなわち近代韓国における魯迅の受容とその文学的再生産の様相を探ることである。言い換えれば、「近代韓国における魯迅の読書史」である。本論は近代韓国における魯迅の受容やその文学的継承の様相について分析し、文学史的位置づけを試みた最初の試みでもある。

混沌や閉塞の近代を生き抜いた魯迅と韓国知識人たちは共に厳しい旧時代の重圧を背負いながら、当時人類の進むべき道とされた課題、すなわち「国民国家の達成」を熱望し、その道のりにおける封建と近代の錯綜した混沌の中でもがきながら至難な戦いを続けたのである。その一方で、近代における中国と韓国はそれぞれ半植民地状況と植民地状況という厳然と異なる条件下に置かれており、中国の半植民地状況に比べ韓国の植民地状況とは一層身動きの難しい、厳しい現実であった。魯迅にはともかく祖国があり、その祖国のあり方について熾烈な批判と苦悩を祖国の中で続けることができた。この一定の自由、この余地こそやはり魯迅を魯迅たらしめた条件の一つであり、また韓国知識人が魯迅に多くの暗示と啓示とを受けた所以ではなかろうか。

第一部ではまず近代韓国における活字メディアの状況、そしてそのメディアにおける魯迅の捉え方を丁来東、申彦俊、李陸史三人を手がかりにして見ておく。魯迅の文学的再生産が行われる土台と背景を探るためにある。植民地期韓国の活字メディアを丁寧に調べ、またその時代の文学作品を注意深く読み直せば、魯迅がかつて韓国知識人に極めて存在感のある外国文豪の一人として受け止められていたことを確認することができる。中国を近代国民国家として生まれ変わらせるべく半封建・半植民地の現実と戦い続けねばならなかった魯迅の苦悩やその文学的な表現に、植民地韓国の知識人たちは訴えかけられるものを見出していたに違いない。

第二部では、魯迅の創り出したすぐれた文学的形象「阿Q」が植民地を生きる卑屈な自画像と重ねあわせられながら韓国人にとって一層説得力と実感を呼び起こした点を解き明かす。一九二〇年代以来、韓国の近代的な活字メディアを通じて当代中国の様々なニュースと共に紹介された魯迅は、一九三〇年代、つまり満州事変を前後して硬直化していく植民地体制下でさらに熱い共感をもって読まれていく。いよいよ近代韓国において魯迅の「阿Q」は一つの文学的コードとして流通し、魯迅文学における諸形象は「阿Q的人間」と「非阿Q的人間」として理解されるようなるのである。

この「阿Q」の文学的再生産の痕跡を、まず韓国近代文学史上最大の作家といわれた李光洙から見つけ出すことができる。民族の教師を自任し続けた李が、その後期に当たる三〇年代後半以後、作品に明らかな変化を見せたことは周知の事実である。これに関する従来の説明に加え、本論はその変化の背後に魯迅の影が見え隠れしていることを指摘した。李は植民地民衆の姿から「阿Q」を見いだし、結局、後日みずから「朝鮮の阿鬼を描きたかった」と語るところの「万爺の死」を執筆するに至る。要するに彼が従来描き続けた、民族共同体の理想を体現するインテリや、また「民族意識を密かに包み込んだ」と回想するところの、歴史的人物に虚

構の衣をまとわせた数々の歴史小説とは大きく異なる作品である。李はここへ来て、生涯とりつかれていた啓蒙者としての使命感、同胞に対する「教師意識」からようやく放たれ、「阿Q的知識人」の自画像に出会っていくのである。そしてこの曲がり角に魯迅がはっきりと顔を出しているのだ。こうして一九二〇、三〇年代韓国における魯迅、特に「阿Q」の形象が一種の文学コード化し、広く流通していたことを確証できよう。

魯迅の文学的再生産は、植民地末期になり金史良という二重言語作家によって一層深みをもって受け継がれた。金の作品から、「内鮮一体」を強いられる植民地末期の閉塞状況の中で高度に内面化した抵抗性を見いだすのは困難なことではない。金は、日本人父と韓国人母を持つ混血少年が自虐的で屈折した心理を乗り越えていく過程を描いた短編小説「光の中に」で一九四〇年芥川賞の最終候補として注目を浴びて以来、多数の作品を日本語で発表した。日本語による創作自体を一種の「屈従」と見なす見解は当時も今日も根強いが、金の関心事は使用する言語を問わずあくまでも虐げられた同族の現実と生き方であり、苦悩に満ちた植民地知識人の自意識や内面世界だったことに注目すべきであろう。さらに、「天馬」における、あの植民地末期韓国文壇の一性格破綻者の阿Q的精神や奇行には植民地知識人型阿Qの影が、そして「草深し」では絶望に満ちた気弱な知識人や卑屈な植民地インテリの姿が重ね合わせられる。

金史良が一九四一年に発表した短編「Q伯爵」は、留置場で「Q伯爵」と呼ばれていた名無しの一韓国人高等ルンペンの話である。「Q伯爵」は当時植民地住民のほんの一握りに過ぎない特權階層——日本の皇室から爵位を授かり地方長官をつとめる民族の裏切り者たる「親日派」——の息子であり、思想犯として捕まるのを心から願っているかのように愚行を繰り返す自称アナキストの留置場常連である。「Q伯爵」は、植民地現実への深い絶望を、三〇年代以来急増した経済難民や移民の群れに混じって貧困と絶望の汽車に乗り込み酔いつぶれることにより、せめて彼らと情緒的なつながりを保とうとする。「Q伯爵」とは滑稽な感じを漂わせながらもどこかしつとりした悲愴感あふれる形象である。李光洙が植民地民衆の姿に「朝鮮の阿鬼」を見ていたとすれば、「彼らと同じ方向に向かって走っている感じだけで救われる気持ちになる」とつぶやく「Q伯爵」は、三〇年代以来韓国知識人の間ですでに一つの文学記号として流通していた「阿Q」を「余計者の植民地知識人像」として生まれ変わらせたものといえよう。

終戦による植民地解放と共に始まった「冷戦」は魯迅文学をめぐる植民地期以来の伝統を韓半島の南半分の地域でほとんど途絶えさせる一方、政治的な読みが主になされた北朝鮮においても魯迅への理解は一定の偏向を余儀なくされた。「韓国人の魯迅読み」の伝統は皮肉にも韓半島を離れたところ、まさに日本の地で「在日」を生きる人々によって読み継がれていくことになる。金史良の直系を自任する在日コリアン作家たちは、祖国の政治状況に直接には拘束されず、そして戦後日本の開かれた魯迅論の中で魯迅を読み続けていくことができたのであろう。そして二つの祖国どちらにも自分を帰属させることができず、一種の精神的亡命生活を強いられたともいえる在日コリアン知識人たちが、「在日を生きる」中で味わなければならなかつた様々な疎外体験を通して新しい阿Q像を創っていくようすは特に興味深い。これは本論が対象とする時代の範囲外のものなので詳しくは論じず今後の課題とし、一例を挙げるにとどめたい。